

半助介

(7)

竹内勇太郎



本勘介 (7)

竹内勇太郎



学習研究社

著者略歴 大正九年、山梨県生まれ。地方の新聞社に勤務の後、テレビ放送開始とともに脚本家としてデビュー。「赤胴鈴之助」「東京の人」「三匹の侍」など初期の代表作から最近の「新五捕物帳」まで作品多数。劇作もやるほか小説も手がけ、「小説樋口一葉」「女俠曼陀羅」「飛騨の女」などがある。

山本勘介 7

昭和六十年十二月一日 第一刷発行

著者 竹内 勇太郎

発行者 鈴木 泰二

発行所 株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台四ノ四〇ノ五

郵便番号 一四五

電話 東京七二〇局一一二

振替 東京八一四二九三〇

印刷

信毎書籍印刷株式会社

株式会社美術版画社

© YÛTARÔ TAKEUCHI Printed in Japan 1985
165 247—1002 ISBN4—05—102036—3 C0393

※この本に関するお問合せなどありましたら、文書は東京都大田区上池台4の40の5（〒145）学研お客さま相談センターへ、電話は東京（03）720—1111 へお願いします。

※本書内容の無断複写を禁じます。

目

次

甲斐の夏

7

妖術闇に散る

48

堺へ

85

御岬屋の女

130

どくろ船

172

信方戦死

218

鎮魂の舞

251

決戦川中島

285

編集 一寸社
装幀 川田 幹
挿絵 木俣清史

山本勘介

7

甲斐の夏

勘介たちの一行は、夕布姫の網代輿を守るようにして諏訪を発って甲府に向かった。

勘介は素褌小袴に垂太刀、侍烏帽子の正装で栗毛の駿馬にまたがり、胴巻に三角笠の足輕が十五人、それに諏訪家の紋章入りの油単をかけた唐櫃がいくつも、車長持や荷駄に積まれて続いた。

——夕布姫さまが甲斐に。

どこで噂を聞きつけたのか、町衆や百姓たちが街道に群がり寄って、夕布姫の網代輿を見送った。

——可哀相に。

——ご不運な姫さま。

彼らの顔は一樣に暗く、悲痛さをみせていた。

諏訪の大祝として、信仰的な信望をみせていた諏訪家が、一瞬にして潰え去った。それは諏訪領の人々にとって、まさに衝撃的な出来事であった。

当主頼重よりしげの自刃じじん、そして正室ねね禰々ねねの死が続き、嫡男寅王ちやくなんとらおウの変死、そしてまた唯ひとり諏訪家の血を引く夕布姫が、宿敵とも思える武田家の本拠甲府に送られていくのである。

人々は顔を引きつらせ、哀悼あいとうの眸で夕布姫の行列をいつまでも見送っていた。

暑い夏の陽光が射るように激しく一行にふりそそいだ。

足輕たちは流れ落ちる汗を拭ぬぐい、喘あえぐように重い足取りで進んだ。

だが、青柳あおやぎの郷を過ぎ御射山みてやまの麓ふもとにさしかかる頃になると、陽が沈みかけ同時に高原の涼風が爽やかに雑木並木に葉ずれの音を立てはじめた。

「待て」

先頭を行く勘介が、右手を上げて合図をした。

御射山の麓にさしかかった頃から、異体な兜巾とぎん、篠掛すかけの勸進僧かんしんそうが五人、一行のあとをつけてくるのに気付いたからである。

勘介は道の一隅に行列を止め、彼らをやり過ごそうとした。だが、彼らは行列が止まると自分たちも足を止め、行列の動き出すのを待った。

——明らかに黒金一族。

勘介は察した。

「出発」

勘介は声をかけた。

行列は動きはじめた。

だが、奇妙なことにいつまでもたっても山伏たちは一向に襲撃する気配をみせなかった。

その上、彼らにはときには大仰に鈴を鳴らし、法螺を吹き鳴らした。それは、自分たちの存在を、相手にことさらに誇示しているようにさえ思えた。

五人の山伏たちは、勘介たちの一行が立ち止まれば同じように足を止め、動きはじめると再び歩きはじめた。

——示威か。

勘介は苦笑した。一種の心理作戦である。敵に自分達の姿を誇示し、執拗に相手に喰い下がっていく。相手は次第に焦り苛立ち、精神的に疲れ果てていく。

栗生から大平を過ぎると、もう国境である。すでにこのあたりは高原で、白樺や赤松の群落が続き、丈余の青草の中からすすきの穂が爽やかに涼風に揺れていた。

山鳥や鹿、兎の群れが走る高原の道を勘介たちは黙々と歩み続けた。

——蔦木の庄までは無理かな。

勘介は疲労をみせている足軽たちを振り返った。足軽たちよりも、夕布姫の網代輿を守ってお福たちの疲労が目立った。

すでに暮色が深くなった。

大平の郷を過ぎると右側に草屋根の辻堂があった。埃まみれの連子窓から中をのぞくと毘沙門天や阿彌陀如来の荒彫りの坐像が安置されていた。

「一休みだ」

勘介は馬から降りると、夕布姫とお福とともに辻堂の中に入った。

足軽たちは辻堂の前の青草に、倒れ込むようにして一息ついた。

辻堂をとり巻くようにして樅や檜、杉などの樹々が大枝を張りめぐらして深いみどりの闇をつくっていた。

輿から降りたとき、

「涼しいこと」

と、夕布姫は眸を細めるようにして微笑した。

すでに新涼をみせている高原の風が、漆黒の彼女の垂れ髪をなぶった。

——美しい。

勘介はその夕布姫の横顔をみて、心の中でそう思った。

——似ている。昔のちづるとうり二つだ。

またしても勘介の胸に、十何年か前のちづるの清雅な横顔が浮かび上がった。

四半とき（三十分）ほどして、勘介と夕布姫たちは辻堂から姿をみせた。

「出発」

勘介は声をかけた。

夕布姫たちの一行は再び歩きはじめた。

野猿やりすが樹間を飛び走った。

突然、法螺の音が流れた。

一行のあとを追う山伏たちは、相変わらず執拗に夕布姫の行列を追い続けていた。

勘介は挑発を避けるように、法螺の音を無視して進んだ。

程なく原の茶屋である。

道は急に狭くなった。岩壁が青苔や羊歯しだをつけて道の上にせり出し、片方は赤松の林が鋭い斜面に枝を上げ、その斜面は深い峡谷に続いていた。

——あ。

勘介は突然馬を止めた。

前方に杉、檜の巨木が五、六本、おり重なるように切り倒されていた。それらの太い幹が完全に道を封じ、強く張った枝々が小山のように行く手をはばんでいた。

「や、これはどうじゃ」

足輕たちが騒ぎ出した。

男の足でこれを踏み越えるにしても一刻（二時間）近くはかかる。それだけに、夕布姫やお福たちの足では、まず不可能に近い。

「勘介さま」

足輕の宰領役の肥えた男が、困惑しきった表情で勘介に近寄って来た。

その時、鋭い笹笛の音が響いた。

瞬間、それに応えるように獣の咆哮ほうこうが起こった。

「狼だ」

足輕たちが叫んだ。

咆哮は続けざまに起こった。

「あつ、あそこだ」

足輕の一人が岩壁の羊歯の中から牙をむき出して唸うなり声を立てている狼を発見した。

腰元たちの悲鳴と、足軽たちの怒声が同時に起こった。

狼が高い岩壁の上から足軽たちの中に躍り込んできた。三匹であった。どれも小牛ほどの大ぶりの狼で、それぞれ毛を逆立て、牙をむき出し生木を裂くような唸り声を上げながら、猛然と足軽たちに襲いかかってきた。

足軽たちの中から悲鳴や怒声が巻き起こった。彼らは喉首や肩先に噛みついてくる狼を、槍や刀で必死に振り払った。

だが、敏捷な狼たちは跳ね飛び走って、次々に足軽たちに襲いかかっていった。

「輿を守れ、輿を岩かげにかくせ」

勘介は太刀を振り狼をはね上げ、蹴り上げながら必死に叫んだ。

輿を担いでいた男たちが、狼に襲われながらもなんとか網代輿を岩かげに運んだ頃は、すでに足軽の何人かは狼に喉首を扶られ、胸や肩先から血を噴き上げ、苦悶の呻きを漏らしながら道の上になぐられた。

狼たちの攻撃は執拗であった。狼たちは刀や槍で扶られ体から血を噴き上げながらも、その意志はいささかもおとろえなかった。

狼の咆哮と足軽たちの悲鳴と怒声が間断なく続き、高原の間道は獣たちと人間との奇妙で凄惨な死闘の場となった。

再び鋭い笹笛が鳴った。

その笛の音を聞くと、狼たちは一瞬その動きを止めたが、次の瞬間彼らは身を躍らせて熊笹の中に姿を消した。

——助かったか。

粟立つ表情で、足輕たちはよろめくように青草の上に坐った。

半数以上が体に血を滲ませ、そのうち四、五人は重傷とみえて苦悶の呻きを上げてうずくまっていた。

「勘介」

狼と足輕たちの死闘を傍観していた山伏たちの一行の中から声がした。明らかに黒金伴内の声であった。

「これより第二の攻撃を加える。夕布姫ともども冥土へ行け」

その言葉が終わらぬうちに、足輕たちのなかから悶絶の悲鳴が起こった。小柄であった。鋭く研ぎすまされた小柄が、夕闇の中を流星のように次々と走った。

たちまち五、六人の足輕たちが喉や胸に小柄をうけて、血を噴き上げながらのけぞり倒れた。

「敵は頭上の松の枝と岩壁の上だ。樹間に身を伏せて備えよ」

勘介が叫んだ。だが、そのときはすでに雨のように降りそそぐ小柄のために、おおかたの足輕たちは血だるまになって地上に転がっていた。

勘介の体が大きくよろめいた。右肢に同時に二本の小柄を受けたのだ。

「おのれ」

勘介は動かなくなった右肢を引きずりながら次々に飛んでくる小柄を、太刀で必死に払い防いでいた。

「もういい、止めい」

伴内の声が薄闇の中に流れた。

小柄の襲撃は止んだ。

勘介は太刀を杖に、ともすれば倒れそうになる体を支えて激しい息づかいをみせていた。その足もとには、深手の足軽たちが身をねじ曲げるようにしながら、呻き苦しんでいた。

「勘介」

二本の小柄を右肢に受けたまま、喘ぎ佇む勘介のところに、ゆっくりと山伏姿の伴内が近づいてきた。

「分かったか、勘介」

なぶるような伴内の口調であった。

「俺は嘘は言わぬ。あくまで夕布姫を甲府へ送るといふなら、姫と勘介の命はない……そうはつきりと言ふたはずだ」

「だから、なんだ」

苦痛に堪えながら勘介が言った。

「念もない、言ふた通り仕置をする……夕布姫も覚悟することだ」

伴内は岩かげの網代輿に視線を移した。

「これより勘介を成敗する。その後は姫だ、姫の命も頂戴する」

だが、網代輿の中からは返事はかえってこなかった。

「さらばだ、勘介、覚悟」

伴内は再びゆっくりと前に進んだ。藤巻太刀を引き抜いた伴内は、そのきつききを勘介の胸も